

秦 廃 寺

2000. 3

大阪府教育委員会

はしがき

秦廃寺は、飛鳥時代の渡来人集団である秦氏が建立したと考えられる寺院跡です。以前は、地名や古瓦の出土などからその存在が推定されていましたが、平成8年から9年にかけて府営半田住宅の建て替え工事に先立って行われた発掘調査によって、寺院の一角や関連する建物群、道路の跡などやさらに寺院に関わる大量の瓦や土器が発見されました。このように秦廃寺解明の糸口が見いだされてきましたが、寺院の解明にはまだまだ不明の点が多いといえます。

今回、府道大阪和泉泉南線の歩道設置工事にともなって、発掘調査を行いました。調査規模の小さなものではありました、先の調査に関連した遺構の広がりを確認するなど、いくつか秦廃寺の解明にあたって、有効な所見を得ることができました。将来、明らかにされるであろう秦廃寺の実像解明にむけての一助になると信じます。

調査に際しましては、地元の方々ならびに関係各位に多くのご協力をいただき、深く感謝いたします。引き続き、皆様のご理解とご協力をお願いします。

平成12年3月

大 阪 府 教 育 委 員 会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

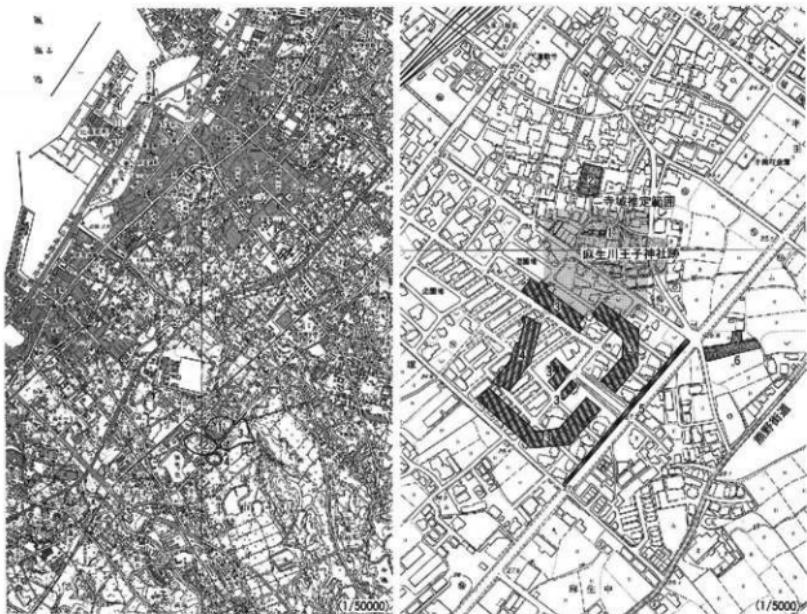
1. 本書は、府道大阪和泉泉南線の歩道設置工事に先立って大阪府教育委員会が実施した貝塚市半田地内所在の秦庵寺の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府岸和田土木事務所建設課の依頼を受け、文化財保護課調査第1係技師亀島重則を担当者として実施した。
3. 現地調査は、平成11年度事業として、平成11年9月から開始し、平成11年11月まで行った。なお、出土資料の整理作業は、現地作業と並行して始め、平成12年3月まで行った。
4. 本書で用いた標高はすべてT. P. 値で、単位はmである。
5. 土層の色調表現は、小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』7版(1987)に拠った。
6. 本書の執筆・編集は、亀島が行った。

第1章 調査にいたる経過

秦廃寺は貝塚市の北部、半田に所在する。南北250m、東西240mを範囲とし、飛鳥時代～奈良時代の寺院跡と考えられている。

貝塚市域は、南に和泉山脈を負い、大阪湾にいたるまで山地・丘陵・段丘・海浜の低地と高度を下げながら地形の変化を見せてている。この内、標高10～20m代の段丘面はよく発達しており、これより低地部にかけてが人々の主要な生活空間となっている。この段丘面を開拓して河川が大阪湾に注ぐ。貝塚では、北から津田川、近木川、見出川が主要な河川で、さきの地形区分を縦断して、地理的な小単位を形成する。秦廃寺は、岸和田市域との境界を流れる津田川左岸に近い段丘上に立地する。

秦廃寺は古くから地名や古瓦の出土などからその存在が推定されていた。半田集落にある熊野街道に付設された麻生川王子神社跡で瓦が採集され、白鳳期に建立された寺院跡と考えられている。1998年、貝塚市教育委員会によって、住宅の建て替えにともなう発掘調査が開始されたが、寺院に関連する明確な遺構の検出には至らなかった。1996年～97年にかけて半田集落の南に接する府営半田住宅の建て替え工事に先立って発掘調査が実施された。ここでは、6世紀後半から8世紀前半にかけての土坑、溝、竪穴住居、掘立柱建物、道路跡などや寺院に供された大量の瓦や



(1.秦廃寺 2.麻生中下代 3.半田 4.麻生中)

第1図 調査位置図 (1/50000・1/5000) (5が今回の調査地
1・2・6 貝塚市教育委員会調査)
3・4・5 大阪府教育委員会調査)

土器などが検出された。これらの遺構群は年代・性格などから、古墳時代後期（6世紀後半～末）、飛鳥時代（7世紀前半～中葉）、飛鳥時代～奈良時代（7世紀後半～8世紀前半）の3時期に整理されている。とくに調査地の北端付近で東西に直線に延びる段が検出され、寺域の南縁と想定された。さらにこの南に展開する掘立柱建物を寺院に関連する施設と考えている。これによってはじめて秦廃寺の実態解明に向けての本格的な発掘調査が始動したといえる。

今回の調査は、大阪府岸和田土木事務所が計画する府道大阪和泉泉南線の歩道設置工事に先立って実施するものである。府営貝塚半田住宅に面する延長200mの区間である。調査の対象となる範囲については、事業者と協議を重ねた。その結果、半田住宅の調査資料を参考に、工事で掘削を要する部分のうち、表層の地盤改良など、深さ約0.5m以内に収まる部分については立会での対応とし、雨水井と管路についても同様の対応をする。深さが約1mに及ぶ擁壁工部分について対象とする。なお、現在車道部分に入っているガス・水道・下水道などは将来的にも歩道側に移設する計画がないとの関係事業者の話から擁壁部に限定した。幅は1.5mとし、遺構面は先のデータから、中世と飛鳥・奈良時代の2面を予想した。調査区は約30mを1スパンとし、北半部3分割、南半部の北1スパンは現況の暗渠をそのまま整備するため除外し、残りの区間を2分割とする。掘削は、上部0.5mを機械で掘削し、以下の層を人力により掘削することとした。実際に北端部から、掘削作業に入ったところ、工事による掘り底が北端の一部で包含層の上部を掠めるところがあるものの、以南では旧耕作土下の床土層内収まることがわかった。下層の包含層や遺構の保存に支障ないものと判断されるので、以下の層については、平面的な調査をせずに各所で深掘り坑を設け、記録することにし、各スパンごとに状況をみて、平面調査の有無を判断しながら、すすめることにした。結果的には、いずれも包含層に到達するところがなく、深掘り坑による調査に留まった。

第2章 調査の成果

a. 調査の方法

先の章で述べたように、当初予定した平面的な調査から、深掘坑を連続して設ける方式に変更した。各調査坑は、1～2mの矩形に掘ることとし、包含層・ベース土の確認を基本とした。各調査坑は、約10mピッチで設定した。北からA～Rの符号をつけて、その名称とした。

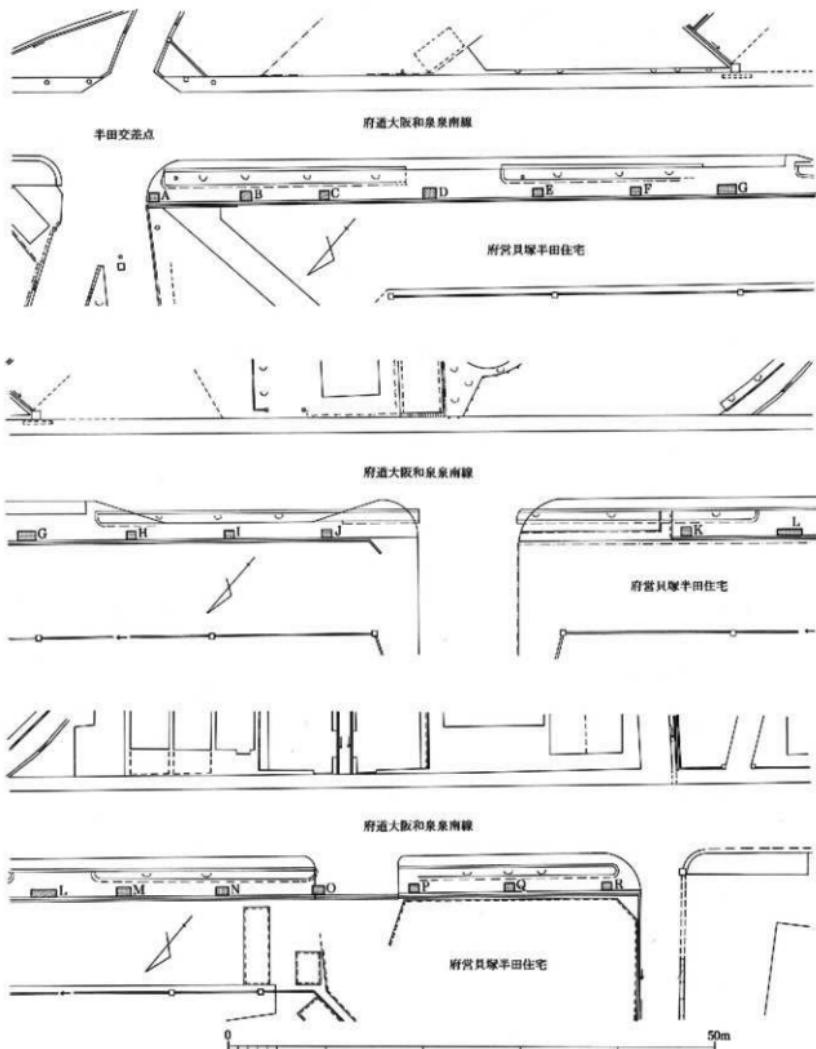
b. 各調査坑の土層・遺構・遺物

調査坑A

旧耕作土（1層、上面25.94m）の下、灰白色微砂質土（2層、床土）、灰白色微砂質土（3層）、灰黄色粘質微砂質土（4層）、灰黄色～明褐色～橙色粘質微砂質土（5層）と堆積する。土師器片が1点出土した。

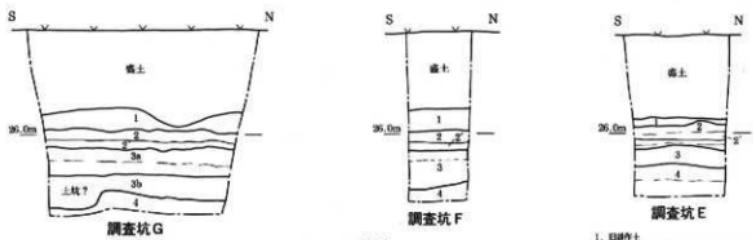
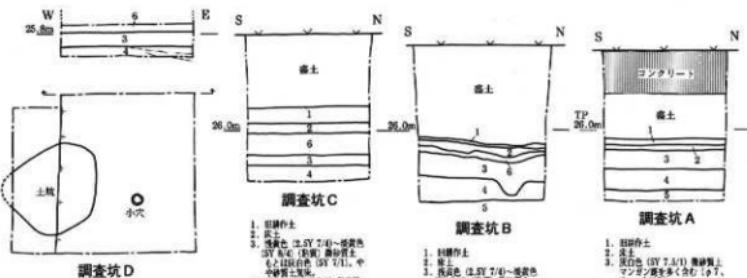
調査坑B

旧耕作土（1層、上面25.94～25.88m）の下、灰白色微砂質土（2層、床土）、にぶい黄橙色



第2図 調査区位置図 (1/500)

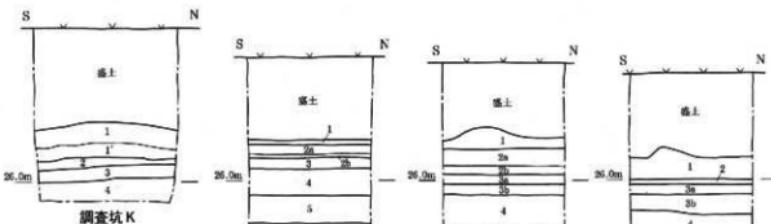
～浅黄色粘質微砂質土（3層）、灰白色微砂質土（4層）、灰黄色粘質微砂質土（5層）、灰黄色～浅黄色～明褐色～橙色粘質微砂質土（6層）と堆積する。土師器片2点、須恵器片が1点出土した。



1. 形状特徴
白色 (3.75) 黄褐色 (3.75) 黄褐色が全体に光澤するが、上部に黒くなる。?
6cm (1.5cm) 7cm (1.5cm) 黄褐色と白色が混在する
2. 色調
黄色 (3.75) 3cm (1.5cm) (3.75) 4cm (1.5cm) 黄褐色と白色が混在する
3. 大きさ
3mm (3-6mm大ささ) を含む (3.75) 3cm (1.5cm) 黄褐色で、上部解剖では、マンゴン類似 (1cm以上) は、黄色 (3.75 1.2cm) (3.75) 5cm (2.5cm) を含む。黄色 (3.75 2cm) (3.75) 7cm (2.5cm) が、黄色と黒褐色を含むが、形状は野菜よりも違う。
4. 表面
表面は平らで、凹凸がある。表皮は薄い。
5. 果肉
果肉は柔らかく、味は酸味がある。
6. 肉質
肉質は柔軟で、味は酸味がある。

1. 日照耕土
2. 黒色土 (ST 7/2) 糜砂質土 下層は酸性化着色土より一歩前 (ST 5/3) を佔す。
3. 黒色 (2.5Y 7/2) 糜砂質土 下層は酸性化れし、明黄色土を有す。
4. 浅白色 (2.5Y 8/1) 糜砂質土 上層部では、白色 (10YR 8/1) 鮮紅が下層部より少し多くなる。
5. 酸性土 (7.5YR 7/6) 糜砂質土 マンガニ

1. 四野耕土
2. 淡灰色 (7.5Y 7/2) 雜質質上: 下部に鐵斑
有し、淡オーライブ色 (17.5Y 5/3) を呈す。
- 2'. 淡色 (2.5Y 7/2) 雜質質上: 下部は鐵斑
か花斑し、淡褐色 (10YR 6/6) を呈す
風化レギ (10YR 5/1) を含む。
3. 淡白色 (5Y 7/1) 粒質質上: マンガニッシュ
(5mm大) を含む (35%)。含金量。
4. 暗褐色 (2.5YR 5/2) 雜質質上:
マンガニッシュ (5mm大以下) を含む
(25%)。上部は3層が並ぶ、鉱物に入る
(マンガニッシュ) 2.7% 2.5mm大以上。



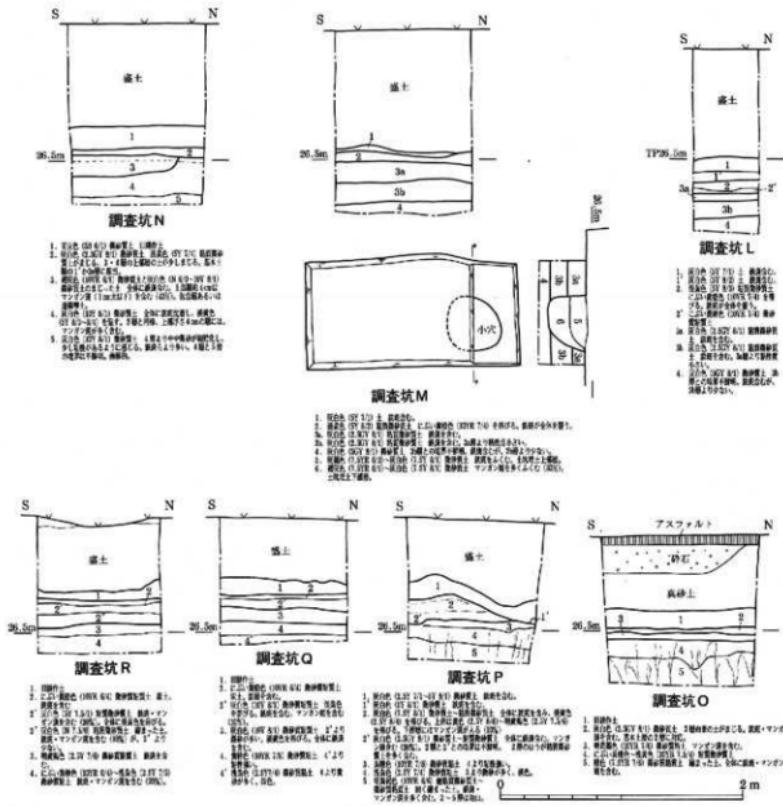
1. 黄白色 (GY 2/1) 土、根糞を含む。
2. 豪白色 (GY 8/1) 土、根糞含む。
3. 暗褐色 (GY 8/3) 粘土質砂質土に、深い青色を帯びる。 (NIR 0.7/4) を有する。被葉が全体を覆う。
4. 黄白色 (GY 8/2) 砂質土、鋪設した上。サンゴ土 (A + B 10cm以下、25%)、被葉を含む。
5. 黄白色 (GY 8/2) 砂質土、3層との境界が不明明。中や粘土質砂質土。全体を被葉が覆い、深い銀白色を帯びる。マンゴン葉を少し含む。(延伸はよ)

6

三〇六

調查坑H

第3図 調査坑(A~K) 土層断面図(1/40)



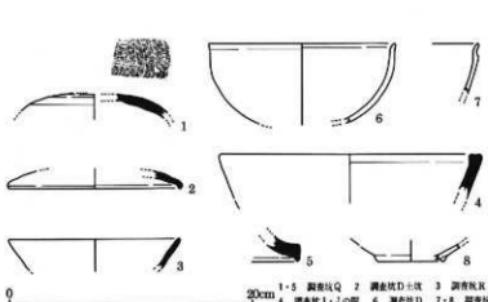
第4図 調査区（L～R）土層断面図（1/40）

調査坑C

旧耕作土（1層、上面26.2m）の下、灰白色微砂質土（2層、床土）、にぶい黄橙色～浅黄色粘質微砂質土（3層）、灰白色微砂質土（4層）、灰黄色粘質微砂質土（5層）、灰黄色浅黄色～明褐色～棕色粘質微砂質土（6層）と堆積する。土器片が1点出土した。

調査坑D

表土からTP 25.8mまでは観察できなかった。浅黄色～淡黄色（粘質）微砂質土（1層）、灰白色微砂質土（2層、遺物包含層）、にぶい黄橙色～浅黄色粘質微砂質土（3層）と堆積する。3層上面で、土坑1基と小穴1基を検出した。土坑は、大きさ80cm×70cmの不整五角形で深さ14cm以上を測る。埋土は灰白色（2.5Y7/1）微砂質土（やや粘質、マンガン斑、3～4mm大以下を含む）で土器細片を含む。小穴は径8cmを測る。土坑内からは、須恵器（杯、蓋・第5図2）2



第5図 遺物実測図 (1/4)

調査坑E

旧耕作土（1層、上面26.12m）の下、灰白色微砂質土（2層）、灰色微砂質土（2'層）、灰白色微砂質土（3層、遺物包含層）、黄橙色微砂質粘質土（4層、地山）と堆積する。調査坑内から須恵器片（蓋杯、6世紀代？）1点、土師器片（甕、椀・第5図8、杯？）10点が出土した。

調査坑F

旧耕作土（1層、上面26.2m）の下、灰白色微砂質土（2層）、灰色微砂質土（2'層）、灰白色微砂質土（3層、遺物包含層）、黄橙色微砂質粘質土（4層、地山）と堆積する。3層灰白色微砂質土は下部層に微砂がやや多く含むもので細分される可能性がある。調査坑内から須恵器片（甕、蓋杯、6世紀代？、杯）12点、土師器片（甕他）2点、瓦片（須恵質・土師質）2点が出土した。

調査坑G

旧耕作土（1層、上面26.2m）の下、灰白色微砂質土（2層）、灰色微砂質土（2'層）、黒褐色～褐色微砂質土（3層、遺物包含層、粘性度の違いにより、細分する。）、黄橙色微砂質粘質土（4層、地山）と堆積する。調査坑内から須恵器片（甕、蓋杯・6世紀代前半？）2点が出土した。

調査坑H

旧耕作土（1層、上面26.2m）の下、灰白色微砂質土（2層）、灰白色微砂質土（3層、遺物包含層、二層に細分する。）、黄橙色微砂質粘質土（4層、地山）と堆積する。調査坑内から須恵器片（壺？）1点、磁器片（近世～近代）2点、染付片1点、白磁片1点が出土した。

調査坑I

旧耕作土（1層、上面26.36m）の下、灰白色微砂質土（2層、二層に細分する。）、灰白色微砂質土（3層、遺物包含層、二層に細分する。）、黄橙色微砂質粘質土（4層、地山）と堆積する。調査坑内から須恵器片（甕）1点が出土した。

点、土師器片（杯他）4点が出土した。調査坑内からは、須恵器片（甕、蓋杯・7世紀代、タコ壺、杯身）9点、土師器片（甕、杯・第5図6、他）42点、焼土塊1点が出土した。

調査坑 J

旧耕作土（1層、上面26.34m）の下、灰白色微砂質土（2層、二層に細分する。）、灰白色微砂質土（3層、遺物包含層）、灰白色微砂質粘土（4層）、にぶい橙色微砂質土（5層、無遺物層、地山？）、にぶい褐色粘質微砂質土と堆積する。調査坑内から須恵器（甕）1点、土師器1点が出土した。調査坑 I と J の間、灰白色微砂質土（2層）で須恵器（甕、蓋杯、他・第5図4）3点、土師器片1点が出土した。

調査坑 K

旧耕作土（1層、上面26.4～26.5m）の下、淡黄色粘質微砂質土（2層）、灰白色微砂質土（3層、遺物包含層）、灰白色微砂質土（4層、地山）と堆積する。

調査坑 L

旧耕作土（1層、26.5m）の下、淡黄色粘質微砂質土（2層、下部のにぶい黄橙色に細分する。）、灰白色粘質微砂質土（3層、粘性度のちがいにより細分する、遺物包含層）、灰白色微砂質土（4層、地山）と堆積する。

調査坑 M

旧耕作土（1層、26.6m）の下、淡黄色粘質微砂質土（2層）、灰白色粘質微砂質土（3層、粘性度のちがいにより細分する、遺物包含層）、灰白色微砂質土（4層、地山）と堆積する。第3層上面で、土坑を1基検出した。径42×25cm以上、深さ32cmで、灰褐色～灰白色微砂質土で埋まる。調査坑内から土師器片（甕？）1点が出土した。

調査坑 N

旧耕作土（1層、26.78m）の下、灰白色微砂質土（2層）、褐色微砂質土と灰白色微砂質土のまじった土（3層、包含層あるいは遺構埋土とみられる。）、灰白色微砂質土（4層）、灰白色微砂質土（5層、4層との境界は不鮮明で漸移的に変化。）と堆積する。

調査坑 O

旧耕作土（1層、26.8m）の下、灰白色微砂質土（2層）、明黄褐色微砂質粘土（3層）、にぶい黄橙色～浅黄色粘質微砂質土（4層）、橙色微砂質粘土（5層）と堆積する。

調査坑 P

旧耕作土（1層、26.7m（畦畔の天端高）～26.97m）の下、灰白色微砂質土～粘質微砂質土（2層、粘性度により細分する。）、黄橙色微砂質粘土（3層）、浅黄色微砂質粘土（4層）、明黄褐色粘質微砂質土～微砂質粘土（5層）と堆積する。調査坑内から須恵器（甕）3点、土師器片（軟質、瓦器の磨耗したものか？）1点が出土した。

調査坑 Q

旧耕作土（1層、26.95m）の下、にぶい黄橙色微砂質粘土（2層）、灰白色微砂質粘土（2層）、灰白色微砂質粘土（3層）、黄橙色微砂質粘土（4層）、明黄浅黄色微砂質粘土（4層）と堆積する。調査坑内から須恵器片（甕、蓋杯・第5図1他・第5図5）11点、土師器片

2点、瓦質土器片1点が出土した。

調査坑R

旧耕作土（1層、26.86m～26.94m（畦畔の天端高）の下、にぶい黄橙色微砂質粘土（2層）、灰白色粘質微砂質土（2'層）、灰白色粘質微砂質土（2''層）、明黄褐色微砂質粘土（3層）、にぶい黄橙色～浅黄色微砂質粘土（4層）と堆積する。調査坑内から須恵器片（甕、蓋杯、杯・第5図3）7点、土師器片（椀高台）1点、瓦器片3点、瓦片1点が出土した。

c. 土層構造（第6図）

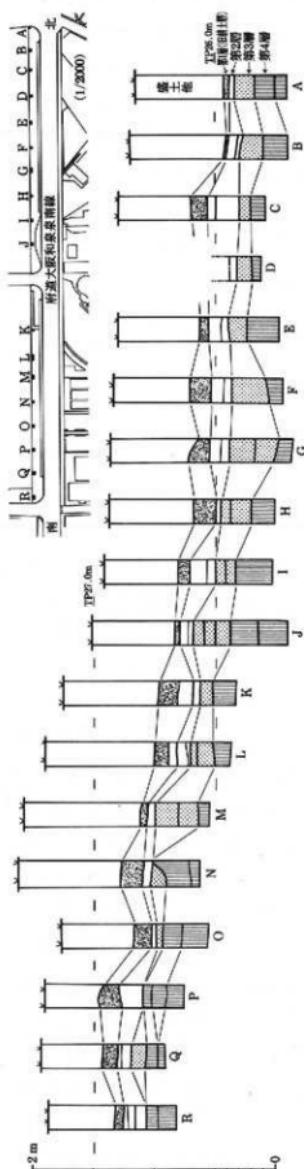
先に各調査坑ごとに土層堆積を中心に記述してきた。つぎに各調査坑ごとの土層を対比して、同一層準の土層を同定し、秦廃寺の土層構造をまとめておこう。

土層構成

各土層を対比してみると、いくらか細部で土層の違いはみられるものの、全体に共通した層序が認められる。堆積環境や要因に差がなく、均質状況であったとみられる。まとめてみると、第1層の旧耕作土から段丘堆積土の第4層までの4層に区分される（土層対照表）。各層の特徴を整理し、各層の内容を定義づけておこう。旧耕作土（第1層）の下には、灰白色系の微砂質土が広く堆積する（第2層）。いずれも鉄班やマンガン斑を含み、褐色を強く帯びるところもある。上部はその多くが旧耕作土の床土となっている層である。色調に差があることだけでなく、土性的にみても、粘性がつよく、細分できるところがある。それが堆積の時期や要因に違いをもつものかどうか明確ではない。細分できたところでは、これを第2a層、第2b層として呼び分ける。層厚4cm～26cmを測る。大体現地表の起伏にならない、南から北へ下降しながら堆積する。第2層の下では、灰白色～黒褐色～褐色の微砂質土～粘質微砂質土が堆積する（第3層）。今回の調査区は、規模が小さく、遺物の出土は量としては多くはないが、もっとも多く遺物を包含する層である。とくに調査坑D・E・Fが多い。土性的にみて、下部が粘性強く、2層に細分した。府営住宅の調査（第3調査区）では、第3層が2層に分かれ（第3a層・第3b層）、下部層上面で遺構が確認された。両調査区の各層が対応できると考えられ、これを堆積時期・環境の差異とみて明確に分離できる可能性がある。この層も全体的に南から北へ高度を下げて、堆積する。しかし、部分的に起伏がみられる。層厚6cm～最大層厚40cmを測る。この下、第4層は、灰黄色系の粘質微砂質土～微砂質粘土が堆積する。北端部の調査坑A～Cでは1～2cm大以下のレキをまじ

土層対照表

調査坑 層準土層	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
第1層	1	1	1	—	1	1	1	1	1	1	1·1'	1·1'	1	1	1	1	1	1
(a層)	2	2			2	2	2	2	2	2	2				2	2	2	2
	3	3			2'	2'	2'	2'	2'	2'	2'				2'	2'	2'	2'
(b層)	3	4	4		2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	—	73	—
			5				3'	3'	3'	3'	3'	3'	3'	3'	3'	3'	3'	3'
第4層	4	5·6	6	3	4	4	4	4	4	5·6	4	4	4	4	4	3·4	3·4	3·4



第6図 土層柱状図

える。段丘形成期の堆積物と考える。遺物は確認していない。つぎに遺構についてまとめておこう。平面的に遺構が検出できたのは、調査坑D（土坑・小穴）・調査坑M（小穴）で、調査坑Dは第4層上面、調査坑Mは第3層上面で検出した。調査坑Dの小穴からは、須恵器片（8世紀）が出土した。なお、第2層上面でもスキ跡が確認されたが、時期は特定できない。

堆積時期

今回の調査坑からは、調査面積にもよるが、土器類の出土は少なく、遺構面や各土層の時期を推定するのは困難である。第2層～第3層からは、須恵器・土師器など、古墳時代～奈良時代の広範囲にわたり、時期を特定しにくい。遺物を伴う遺構として、調査坑Dの1例（土坑、8世紀）がある。遺構面を覆う包含層が示す時期と矛盾がないので、検出遺構面の時期のひとつとみてよい。つぎに西に接して実施された府営住宅の調査成果を援用して時期推定の手がかりとしておこう。本調査区とほぼ同様の層序を形成しており、対応関係にあると考える。しかしここでも泰廟寺の主要な包含層である第3層以外で時期同定できる資料は少ない。まず、第2a・b層から第3a層までをみてみよう。第2b～第3a層で黒色土器A、第3層上面で黒色土器Bあるいは瓦器（判別できない）の小片が出土している。2b層では黒色土器と瓦器がふくまれていて、これより新しい要素の遺物はない。さらに第1・2調査区では瓦器とともに青磁も出土している。これらの事例からすると第2b層は中世の堆積と考えられる。また、第3a層は黒色土器を含む奈良～平安時代前期の堆積土の可能性がある。第3b層からは古墳時代後期から飛鳥・奈良時代の土器が出土している。それぞれ一定程度の広がりをもつ純粋な包含層がないことから、奈良時代に広範囲な削平を伴う、造成工事が行なわれたと考えられる。第2a層では、瓦器を含み、中世の堆積の可能性もあるが、旧耕作土の床土となっていることや近世染付磁器も含む地点もあり、幅があり、全体としては近世以降の堆積と考えられるが、部分的に中世の堆積層があるかもしれない。このように各土層にみられる

堆積時期から大規模な造成工事を伴う開発の存在が考えられる。第3層にみられる古墳時代から奈良時代の遺物を含む包含層の存在は、奈良時代から平安時代以降の造成工事を物語っているのではないだろうか。貝塚市域では13世紀に顕著にみられる。多くは、原野からの耕地化にあたっての造成とみている。この秦廃寺の第3層には瓦器はまじらない。第3層が異なった時期の遺物で構成されていることから、また府営住宅の調査区で発見された秦廃寺と時期的にも位置的にも関わりの深い掘立柱建物群の廃絶後に埋まっているという点で興味深い。奈良時代から、おそらく平安時代に入って、古代の古代氏族の地域支配の象徴であった寺院が衰退し、小規模化あるいは廃絶した後、新たに耕地化が始まっている（水田畦畔が検出されている）。寺域を示す段付近で検出された瓦溜りからも平安期の土器が出土していて、この時期の事情を表わしている。調査区北端、半田交差点東の半田遺跡で検出された奈良時代後半から平安時代前期の建物群の存在もこのような動きのなかで考えられる。貝塚市域の中でも他より先駆けて開発した地域といえる。第2層にかけてこの後もスキ溝は検出されており、耕地としてつづく。

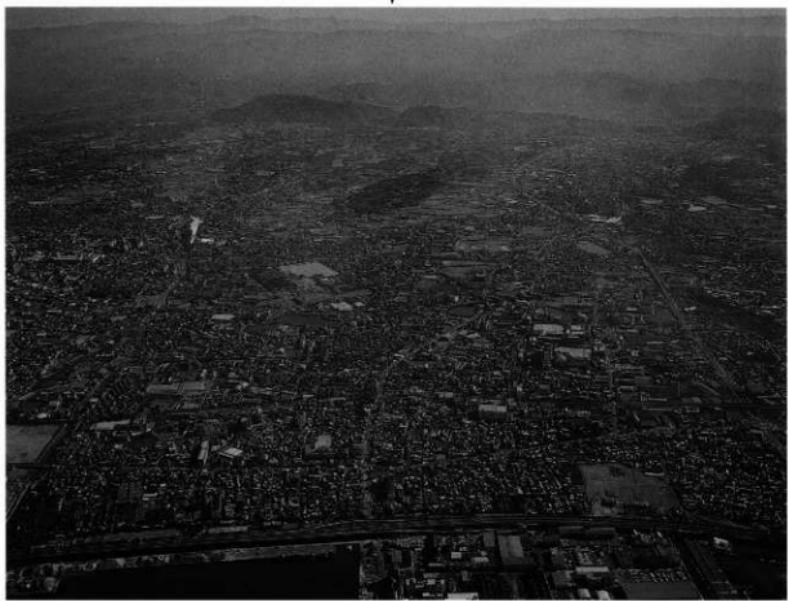
土層と微地形

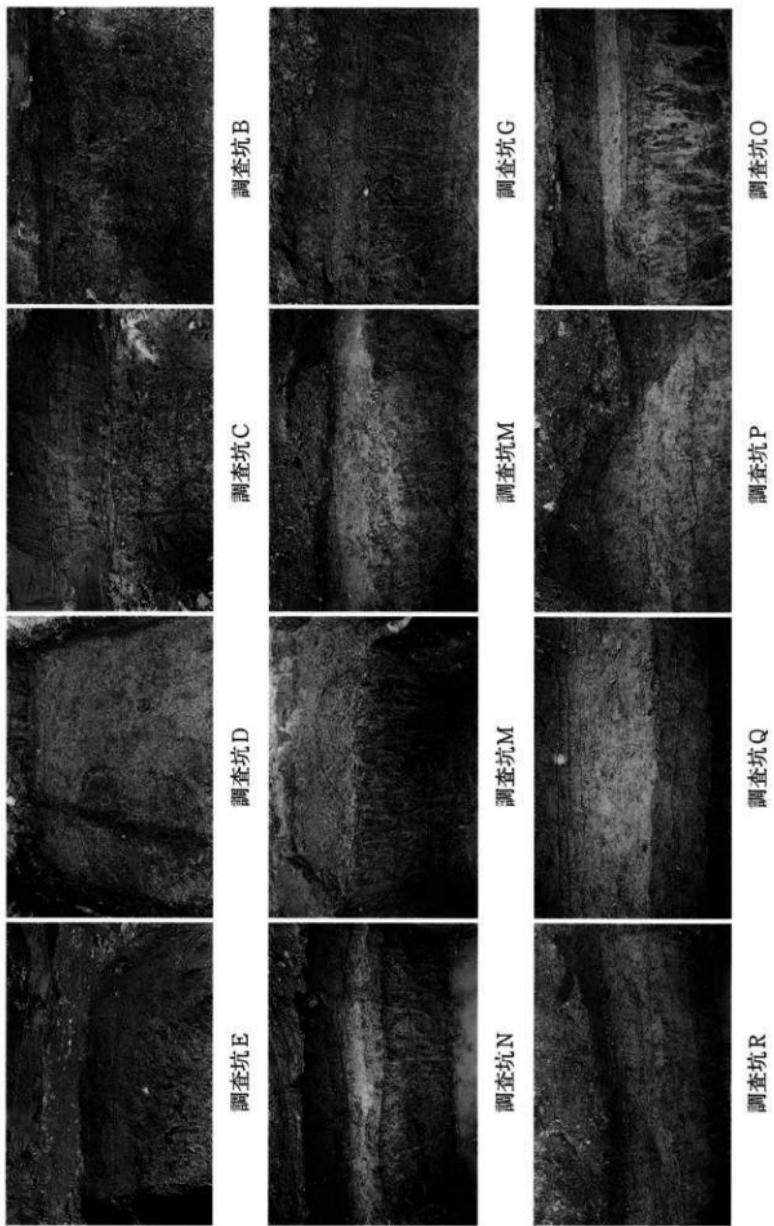
堆積層の高さを比較し、そこに表れた微地形を復元しておこう。段丘形成時の堆積土であり、遺構のベース土でもある第4層は、北端調査坑Aで上面T P 25.68m、南端調査坑Rで26.57m、全体に北に低く、南に高くなり、比高差0.89mを測る。これは本地点が洪積段丘中位面にあり、北側に位置する津田川の支流、古瀬川が形成した開析谷にむかって傾斜しているためとみられる。しかし、この傾斜は単調な線で下降するのではなく、若干の起伏がみられる。下降は、N・M間からはじまり、G付近を底にして（25.46m）、E・F間で少し上がり（25.9m）、緩やかに傾斜する。このことからE～Kにかけて、浅い谷が調査区を横断して走るとみられる。現状ではその方向はつかめない。第3層の堆積によってこの谷はおおよそ埋没してしまう。調査地周辺の地図や空中写真から判読すると、秦廃寺の寺域と推定される区域は、南から北にむかって延びる尾根状微高地の先端部に立地していることがわかる。この尾根の東側には広い谷が南東から北東方向に走る。調査区の北端から東側、唐間池・堂ノ池などが位置する地域である。先にもふれた半田遺跡では、飛鳥時代から平安時代にいたる掘立柱建物群、奈良時代の川などが発見されている。この川は幅約10mで、8世紀中頃の土器類が多く出土していて、埋没後（奈良時代後半）溝や建物が造られている。川の時間的な埋没経過とその後の土地利用からすると自然による埋没というよりも開発の明確な意志をもって埋め、造成した可能性が高いと言えそうである。飛鳥時代から建物が見つかっていることから秦廃寺と関連した建物群の存在も推測される。今回確認した谷もこの広い谷に向かって走るものと考えられる。北端のA～C（D）では第4層に砂礫がまじる。Bが一番深くなり、層厚20cm、底面高25.4mを測る。段丘形成期の古水流の跡と考えられる。以上、乏しい知見ではあるが、まとめてみた。今後の調査によって、より詳細な検討が期待される。

調査の実施および本書の作成にあたっては、白木かおり・貝川晶子・納谷有香子・河本直子・川東貴子の諸氏の援助を得た。また、関連資料の収集にあたって、森村紀代氏に便宜を受けた。記して感謝します。

図 版

図版1 調査地遠景（西から）





秦庵寺関連遺跡既掘調査一覧

番号	調査場所	調査期間	遺 墓	遺 物	面積(m ²)	調査原因	主体	文献	備考
1	半田字 萬生川	79年度	飛鳥~奈良~土坑 連縫面(TP25.2m) / (OP26.5m)	飛鳥~奈良(土師器・須恵器・瓦・土鏡)	30	住宅の増改築	府教委	1	秦庵寺
2	半田209	93年度	近世~漢・土坑 包含層(近世)	中世~近世(瓦・瓦質形容・陶質すり鉢・土 器類・瓦・青磁)	14	住宅	府教委	2	秦庵寺
3	半田	96.8~ 97.3	古墳後期~土坑、飛鳥~磐穴住居・溝・土坑・小穴 奈良~圓柱形壺・道輪・ 古墳後期(須恵器・土師器)	古墳後期(須恵器・土師器)飛鳥~奈良以降 (須恵器・土師器・瓦器)	5400	府営半田在宅建て替え	府教委	3	奈良寺・萬生中子代 (第1・2調査区)
4	半田	98.11	飛鳥~奈良期~柱穴・溝・落ち込み 包含層2層 ベース上面(地山上面, TP25.2~25.9m)	飛鳥~奈良(須恵器・土師器)	80	事務所建設	府教委	4	半田道路
5	半田	98年度	奈良~平安~建物群(8世紀若手~9世紀中頃)	飛鳥~奈良~平安	—	—	府教委	5	半田道路
6	半田	99.3	奈良~川(幅約10m以上, 8世紀後半)	奈良(須恵器)	—	—	府教委	5	半田道路
7	半田	99.8~12	奈生中期~磐穴住居・土坑 古墳期~磐穴住居・溝・土坑 飛鳥~奈良~ 圓柱形壺	奈生(土器・石器) 古墳(土師器・須恵器) 飛鳥~奈良以降(土師器・須恵器・瓦器)	1350	府営半田在宅建て替え	府教委	6	萬生中子代(第3調査 区)(9903)
8	半田地内	99.9~11	飛鳥~奈良以降~土坑・小穴	飛鳥~奈良以降(須恵器・土師器・瓦器)	300	府道多道設置	府教委	本報告	秦庵寺(9903)

- 貝塚市教育委員会 1980. 3 「秦庵寺」『貝塚市発掘調査概要』II (貝塚市文化財調査概要 1980)
- 貝塚市教育委員会 1994. 3 「秦庵寺の調査」『貝塚市遺跡群発掘調査概要』16 (貝塚市埋蔵文化財調査報告 第32集)
- 大阪府教育委員会 1997. 3 「秦庵寺」『奈生中子代遺跡発掘調査概要』
- 貝塚市教育委員会 1999. 3 「半田道路(98~26区)の調査」『貝塚市遺跡群発掘調査概要』21 (貝塚市埋蔵文化財調査報告 第49集)
- 貝塚市教育委員会 1999.10 「発掘調査からみた秦庵寺」『かいかづか文化財だよりテンプス』7号
- 大阪府教育委員会 2000. 3 「萬生中子代遺跡発掘調査報告」

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	はたはいじ 秦庵寺							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	1999-10							
編著者名	亀島 重則							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06 (6941) 0351							
発行年月日	2000年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	北 緯	東 経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
秦庵寺	貝塚市 半田地内	27208	10	34° 25' 50" ~26'	135° 22' 30" ~40"	平成11年 9月~11月	300	府道大阪和 泉州南線の 歩道設置工 事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
秦庵寺	寺院 集落	飛鳥時代 ~奈良時代	土坑、小穴	土師器・須恵器				

大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-10

秦 庵 寺

発 行 大 阪 府 教 育 委 員 会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2000年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

